ちょっと昔の

飯舘村のお正月

飯舘村には、地区ごとに伝わる年迎えの行事が数多くあります。一つひとつの行事に意味があり、豊年満作、家内安全など、さまざまな願いが込められています。

時代の移り変わりと共に、お正月の過ごし方は様変わりしました。また、大家族で多世代が同居する暮らしにも変化が訪れ、そうした伝統行事は徐々に縮小されています。しかし、新しい年の無事や安全、繁栄を祈る行事は、形を変えながら現在に続くものもあります。また、学校などで子どもたちが伝統行事を体験したり、地区によっては田植え踊りなどの復活・継承が行われていたりします。

昭和51年発行の飯舘村史・第三巻「民俗」には、飯舘村に伝わってきたさまざまな正月行事の様子が記録されています。年配の方から聞き取りをした口伝が中心で、当時すでに失われつつあった古風なものを含めて、それぞれの行事の意味を書き記しています。先人の過ごしたお正月の様子を、ちょっとのぞいてみましょう。

歳神様　としがみさま

歳神様は、正月様とも呼ばれます。餅や串柿、ミカン、昆布などをお供えします。柿は「かきまわしのよいように」と連にしてあげました。地区によっては銭に縄を通したものを供えたり、枡にご飯を入れて供えたりしました。お供えをする歳神様の棚をつくったり、掛け軸をかけたりする家もありました。

串柿とは…竹串に干し柿を刺したもので正月飾りの一つ。

写真は、大きな鏡餅が供えられた神棚。
（飯舘村デジタルアーカイブの映像から）

若水汲み　わかみずくみ

家の主人や家督を相続する人が汲みました。年男の役とも言われます。若水汲みの日は、元日や三が日とする所、1月7日や11日とする所もあります。井戸の水神様におさご（清めの米）を供えて汲みました。この水で歳神様（正月様）に供え物をつくりました。若水汲みは平安時代の宮中に起源があるとされ、全国でもさまざまな形で定着しています。

お別火　おべっか

三が日は生臭物（なまぐさもの／肉や魚）は食べずに「お別火」をしました。年取りの時に火は用いるものでないとされ、大晦日に炭を取って囲炉裏の火を消し、囲炉裏を塩で清めました。そして元日の朝に、豆がらで火を焚きつけました。この火を3日間絶やさないようにしたそうです。3日目には外に持って行って水でその火を消し、もう一度豆がらで火を焚きつけました。豆がらはカラカラと音がして、「金のなる木」とされました。

仕事始め

1月2日、切り餅一つと鉈（なた）を持って山に行き、この餅を鉈で削って木の根元にまき、白い紙を結いつけて拝みました。これを「山もし」「初山入り」「切り初め」などと呼びました。その木を切って持ち帰り、火の足しにしました。おさごをまいてから小柴を切る所もありました。
また、仕事によって、畳屋は2、3枚畳仕事をするとか、炭焼きは馬車に炭をつけ出すとか、それぞれに仕事始めをしました。商店ではこの日は早くから店を開けました。

農の始め

1月11日の早朝に、小豆粥に鏡餅を焼いて入れ、それを歳徳神（としとくじん／家毎の神棚に祀る歳神）・田の神・畑の神などに供えました。その後、鍬と鎌を持って田の水口や畑に行き、草刈りや耕作の真似をします。続いて、床の間や神棚に飾ってあった「拝み松（おがんまつ）」をさし、おさごや餅を供えてその年の豊作を祈りました。また、一升枡に米と四角に切った餅を入れて持って行き、半分を供え半分を持ち帰りました。持ち帰った米は炊いて供え、餅は焼いて食べました。この行事には地区によって、さまざまなバリエーションがあります。

五穀豊穣の願いが込められた正月行事

多田 宏さん
綿津見神社 宮司

昭和50年代発行の「飯舘村史」編纂に尽力。また全村避難の間も村に残り「ここが皆さんの心の拠り所になれば」と神社に明かりを灯し続けました。

一年の計は元旦にありという言葉がありますが、年中行事の中でも、新年を迎える行事は特に数多くあります。鍬を振るって田を耕していた時代、米をつくるのは大変な仕事で、冷害や凶作にも見舞われました。「来年こそは」と五穀豊穣を祈ったのが、こうした行事の本来の意味合いではないでしょうか。

また「仕事始め」というと、昔は山仕事の意味合いが強かったと思います。「農の始め」として行われる「拝み松（おがんまつ）」は、恵方（えほう）から松の芯を切って来て行いました。今でも続けている方がありますよ。

正月に「生臭」を食べないという習慣などは今はほとんどなくなりました。一方、若水汲みは、今なら水道の水でも行えるでしょう。家々のやり方は、地域によっても「家例（その家に伝わるしきたり）」によっても異なります。なお、元朝参りというのは、随分後になってからの習慣のようです。この辺りでは、昭和30年代頃からではないでしょうか。

また、厄払いや小正月の田植え踊りは、地域ごとに日にちを決めて行われていました。震災前まで行われていた行事の中には、避難によって失われたものもあったでしょう。そのような中で文化財愛好会の皆さんなど、いろいろな方が伝承に取り組んでいますね。

時代が移り便利な世の中になっても、新しい年を迎える時の人々の願いや心構えの本質は変わりません。令和5年、まずはコロナ禍の収束を願いたいですね。笑顔のあふれるいい年になってほしいものです。